

発 達 296

新旧日本語をあらわす助詞の獲得

: 日・韓両言語の比較

○田原俊司

朴燮淑

伊藤武彦

(東京大学教育学研究科) (東京大学教育学研究科) (和光大学人文学部)

外国人日本語学習者が、しばしば習得困難であると訴える文法項目の1つに助詞ハとガの問題がある。しかし、朝鮮語(以下韓国語と表記)を母語とする者は日本語の助詞ハとガの使い分けを容易に学習することが日本語教育界で知られている。これは韓国語に主題助詞-eun/neunと主格助詞-i/gaが存在し、日本語のハとガに対応した用法を持っているためであると考えられる。構文論的にみると、韓国語言語学でも-eun/neunには主題と対照、-i/gaには主格と総記(排他)のそれぞれ機能があり、日本語のハとガと共通する使い分けの構造があることが指摘されている(洪, 1983)。

一方、日本語の助詞ハとガを文と文の関係、すなわち談話という観点からみると、ハは旧情報を、ガは新情報をあらわすことが指摘されている。田原・伊藤(1985)は先行文脈に基づいて物語を伝達する課題において、ハとガの談話機能の出現・完成の段階として3つの段階を設定することができることを明らかにするとともに、新旧情報の概念と初出・既出の概念は異なる概念であり、ハ・ガはそれぞれ既出・初出ではなく旧・新情報の標識であることを示唆した。ここで、旧情報とは「聞き手の意識にすでに導入されている」と話し手に仮定されている情報、新情報とは「発話の時点で聞き手の意識に存在しないと話し手に仮定されており、この時点で話し手が導入しようと計画している情報」である。しかし、韓国語の-eun/neunと-i/gaにこのような新旧情報に基づく使い分けがあるかどうかについては、その存在が確かめられていない。

本研究の目的は、田原・伊藤(1985)の実験と同一の方法を韓国人の被験者に対して韓国人実験者が韓国語を用いることによって、韓国語に新旧情報に基づく-eun/neunと-i/gaの使い分けがあるかどうか、もしあるとすればその使い分けのパターンは日本語のハとガと比較してどのような特徴を持つのか、さらに使い分けがいつ頃出現しどのような習得過程を経て獲得されていくのかを明らかにすることである。

方法

被験者: 韓国語を母語とするソウル及びソウル近郊の4, 5, 6, 8, 10, 12, 14, 大学生の8群で、各群10名、計80名。実験材料: Fig. 1に示す4枚の絵カード(a), (b), (c), (d)のように、(a), (b)ではそれぞれ異なる動物が個々に

行為をし、(c)では(a), (b)のどちらか片方の動物が他方の動物に行為をし、(d)では(c)で行為を受けた動物が行為をするというように設定された4枚で1組の絵カードを1課題として3課題。その他の実験材料として、コアラの人形、おもちゃの電話機2台、ついでに、電線。手続き: "いまから紙芝居を見せますので、ぬいぐるみの人形にその話を教えてあげてください。ただし、ついでにあなたと人形の間に立ってしまいますから、ぬいぐるみの人形は絵を見ることができなくなってしまいます。ですから、電話で話を教えてあげてください。" という教示をする。実験者の被指物物の指さしの順番は、(a), (b), (c), (d)の順に行い、(a), (b)ではそれぞれの動物を、(c)では行為の主体となる動物を、(d)では(c)で行為を受けた動物を指さす。なお、(b)に対する被験者の言及が終了するとき、実験者は(c)の被指物物を指さす前に、"(c)の(行為主)が、(c)で行為を受ける動物を見つけました" というナレーションを入れる。このナレーションは、田原・伊藤(1985)が日本語においてハとガの談話機能の発達を調査する際、(b)から(c)への移行をスムーズにするために用いたものであり、本実験でもこの方法に従った。なお、以上の教示・ナレーションは韓国語成人母語話者による自然な韓国語で行われ、TやSを強調することはなかった。

結果と考察

本研究の課題は1, 2枚目の絵カード(それぞれ(a), (b)のカード)は被指物である動物が初出のもの、3, 4枚目の絵カード(それぞれ(c), (d)の絵カード)は被指物物が既出のものになっている。

Fig. 2は初出の被指物物を、Fig. 3は既出の被指物物を言及するときの助詞-eun/neun(以下T)と-i/ga(以下S)の使用率を示したものである。被指物物を言及する際、TとS以外の助詞は用いられなかった。Fig. 2より、初出の被指物物を言及するのに使用される助詞は、5歳群を除外するとSの選択率が95.0%以上であった。5歳群が90.0%と他の群と比べて若干低いのは助詞の省略が見られたためであり、5歳群の助詞の省略率は6.7%であった。このような省

Table 1

課題における助詞の使用パターン

a b c d	4	5	6	8	10	12	14	大人(年齢)
SSSS	29	21	28	19	11	3	7	15
SSST		2	1	4	5	3	8	8
SSTS					2	1	1	1
SSTT		1	1	5	11	21	13	5
TTSS		1						
STST					1		1	
STTT				2		2		1
その他	1	5						
合計	30	30	30	30	30	30	30	30

T: -eun/neun, S: -i/ga

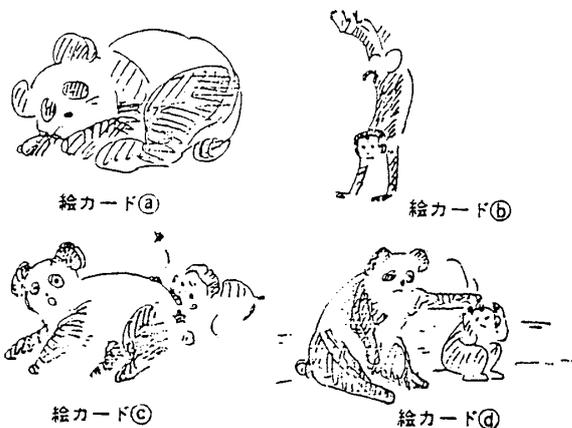


Fig. 1. 本課題で使用された絵カードの一例。

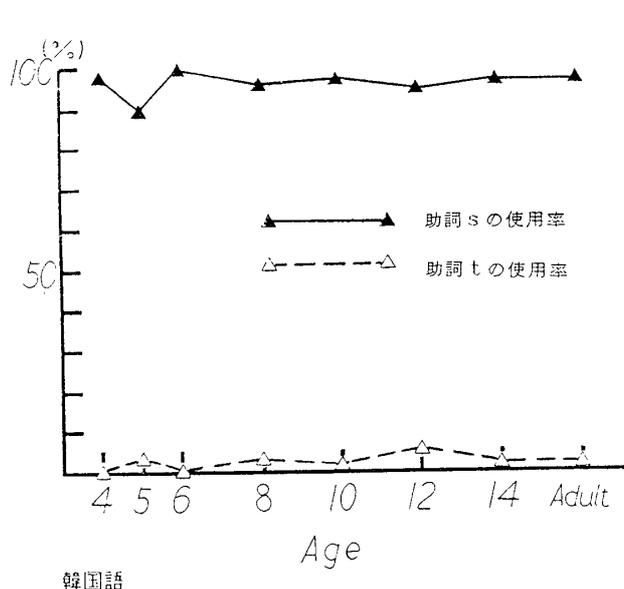


Fig. 2 初出の被指指示物の言及に使用される助詞 s、t の使用率

* s : i/ga, t : eun/neun

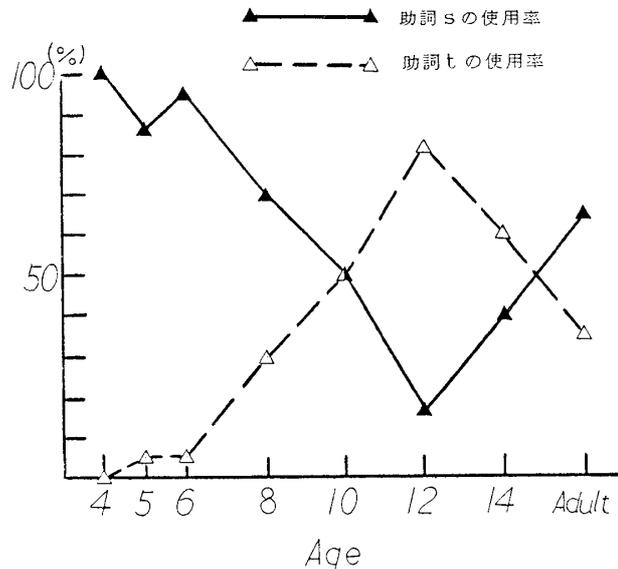


Fig. 3 既出の被指指示物の言及に使用される助詞 s、t の使用率

* s : i/ga, t : eun/neun

略は4歳群においても1.7%の省略率が認められたが、4、5歳群以外の年齢群では見いだされなかった。初出の被指指示物に対してTはほとんど使用されず、いずれの群の使用率も5.0%以下であった。これに対して、Fig. 3に示すように、既出の被指指示物を言及するのに使用されるTとSの分布では年齢間に差が見られた。すなわち、4～6歳群では既出の被指指示物を言及するのに使用される助詞はほとんどSでありTは用いられないこと、Tの使用率は8、10歳群で増大し、12歳群ではSをあまり用いずTの使用が圧倒的になること、しかし、14歳以降ではTの使用率が落ち込み、大人では被指指示物の言及にSの使用がTの使用を上回ることがわかった。

日本語において本実験と同一の方法を採用している田原・伊藤(1985)は、ハとガの談話機能の発達段階として、談話機能に基づいてハとガを使い分けることのできない未獲得期(就学前の幼児)、獲得期(6～12歳)、談話機能に基づいてハとガを使い分ける完成期(14歳以降)の3つ段階を見いだした。本研究の結果は -eun/neun と -i/ga の使い分けに同様の発達過程が存在するというを示すものである。すなわち、韓国語においては、談話機能に基づいて -eun/neun と -i/ga を使い分けられない未獲得期が4～6歳であるのに対して、両助詞の使い分けの進む獲得期が8～10歳、そして、完成期が12歳であり、ほぼ日本語のそれぞれの段階の獲得の時期と対応している。ただし、韓国語母語話者において14歳以降になぜ両助詞の使い分けの割合が減少したのかは今後の検討課題である。

Table 1 は 1～4枚目の絵カードの被指指示物にそれぞれ言及して物語をつくる際、どのような助詞を用いたかを示したものである。1枚目(a)、2枚目(b)の絵カードの被指指示物を言及するのにSを、3枚目(c)、4枚目(d)を言及するのにTを使用したとすれば、(a)(b)(c)(d)の順番に“SSTT”パターンとなる。Table 1より、4～6歳では被指指示物が初出、既出にかかわらず主にSを用い、“SSSS”パターンが大多数を占めていることが明かである。これに対して、12～14歳群では被指指示物の初出、既出の弁別に基づく“SSTT”パターンの割合が増加している。この“SSTT”パターンは5歳群で出現し12歳群まで増加するが、14歳群以降では減少に転

じる。また、5歳～大人群には“SSST”のパターンも認められ、特に大人では“SSST”パターンの数が“SSTT”のそれを上回っている。以上の3パターン以外にも、“SSTS”、“STST”、“STTT”などのパターンが見いだされたが、その割合はわずかであった。

ここで注目すべきパターンは“SSST”パターンである。このパターンは言及すべき既出の被指指示物が二つあるのに、そのうち最初に言及したもの(3枚目の絵カードの行為主)には -eun/neun を用いないというものである。しかも、このパターンは8歳以降高い割合で見られ、特に大人では“SSSS”パターンを除き最も多いパターンとなっている。この結果は、主題助詞 -eun/neun、主格助詞 -i/ga がそれぞれ既出、初出の標識ではないことを示している。しかし、同時に、8歳以降大人を除き“SSTT”よりも“SSTT”のパターンの方が多いことから、既出の被指指示物に対しては主題助詞を用いる傾向が高いことも否定できない。この相反する事実に対する1つの説明は、新・旧情報の概念と初出・既出の概念との差異と共通点に基づく説明である。“初出・既出”とは先行する発話の中にこれから言及しようとする事があるか否かで、あった場合には既出、ない場合には初出になるのに対して、“新・旧情報”とはこれから言及しようとする事物が聞き手の意識にすでに導入されていると話し手に仮定されているか否かで、話し手が導入されていると仮定しては旧情報、仮定していなければ新情報になる。従って、これから言及しようとする事物が既出であっても、話し手が聞き手の意識に、まだその事物が導入されていないと仮定すれば新情報になる。本実験での“SSST”パターンの反応は、まさに3枚目の絵カードの既出情報を新情報として扱った結果であると考えられる。この韓国語の“SSST”に相当するパターンは日本語(“ガガガバ”パターン)にも6歳以降多数みられた。

本研究は、談話機能に基づく韓国語の主題助詞と主格助詞が既出・初出ではなく、新・旧情報に基づいて使い分けられていることを示唆するものである。このことは韓国語のみならず日本語にも見いだされており、この点で日・韓両言語の主題と主格の用法の共通性が指摘された。